



Title	マルクスからヴィゴツキー、そしてバフチンへ：マルクスの意識論を出発点として
Author(s)	西口, 光一
Citation	多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2014, 18, p. 41-54
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/50828">https://doi.org/10.18910/50828</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## マルクスからヴィゴツキー、そしてバフチンへ — マルクスの意識論を出発点として —

西口 光一\*

### 要 旨

本稿では引用等を手がかりとし文献を辿って、ヴィゴツキーとバフチンがマルクスから何を引き継ぎそれをどう発展させたかを検討した。その結果、ヴィゴツキーとバフチンは共にマルクスの人間観や意識観から意識の記号による被媒介性という見解を導いていること、そしてヴィゴツキーは一貫して発達研究に関心を寄せていることが明らかになった。それに対し、バフチンは意識の記号による被媒介性の見解をさらに推し進めて、イデオロギーと心理の関係、心理と記号の関係、言語活動における心理過程と記号の間の往還運動、そして対話原理へとさせていることが明らかになった。バフチンのそのような議論は、人と人の接触・交流にこれまでにない新たな視点を提供するものとして、第二言語の習得と教育の研究の立場から大いに注目される。

【キーワード】バフチン、ソシュール、イデオロギー的記号、社会的交通、言語的交通

### はじめに

ヴィゴツキー (L. S. Vygotsky, 1896-1934) は、急速に研究が進展している文化心理学の淵源となる革命的な発達心理学者であり、近年はヴィゴツキーの発想の第二言語習得研究への応用も進んでいる。一方、文学批評と言語哲学の巨人として現れたバフチン (M. M. Bakhtin, 1895-1975) の思想は、文学研究にとどまらず人類学や心理学や教育学などにも採り入れられ、最近では第二言語教育学でもバフチン理論の応用の可能性が検討されている (西口, 2013, Hall, 1993; 1995, など)。

革命後のロシアの知的雰囲気の中で誕生したヴィゴツキーの発達心理学とバフチンの言語哲学はマルクス主義の思想的伝統を引き継いでおり、実際に彼らの著作でマルクスやエンゲルスの思想が言及されたりその著作の一節が引用されたりすることもある。しかしながら、ヴィゴツキーが実際にマルクスから何を引き継

いでそれをどのように発展させたのか、またバフチンはどうなのかということについては必ずしも分明でない。本稿では、マルクスの意識論を出発点として、そのようなテーマについて検討したい。第二言語教育学に関心を置く本稿としては、そのような作業を通して、ヴィゴツキーとバフチンのそれぞれの理論が第二言語の習得と教育の研究にどのように関わり得るものであるかを検討することを目的としている。

### 1 マルクスにおける精神・意識・イデオロギー

#### 1-1 辩証法的唯物論と意識

マルクスは、『経済学・哲学草稿』(マルクス, 1844/2010、以下『経哲草稿』とする) や『ドイツ・イデオロギー』(マルクス/エンゲルス, 1845-46/2002、以下『ド・イデ』とする)<sup>1</sup> や「フォイエルバッハに関するテーゼ」(マルクス/エンゲルス, 1844-47/2002、

\* 大阪大学国際教育交流センター教授

以下「テーゼ」とする)などの初期の著作でその独自の人間観や社会観を提示している。意識やイデオロギーについての考え方もそうした著作の中で論じられている。

『ド・イデ』の序論でマルクスは、動物と区別される人間の存在形態を次のように規定している。

人間史全般の第一の前提是、いうまでもなく、生きた人間諸個人の生存である。これらの諸個人が自らを動物から区別することになる第一の歴史的行為は、彼らが思考するということではなく、彼らが自らの生活手段を生産し始めるということである。

第一に確定されるべき構成要因は、それゆえ、これら諸個人の身体組織と、それによって与えられる身体以外の自然に対する関係である。…人間は、意識によって、宗教によって、その他お望みのものによって、動物から区別されうる。人間自身は、自らの生活手段を生産し始めるや否や、自らを動物から区別し始める。…人間は自らの生活手段を生産することによって、間接的に自らの物質的な生そのものを生産する。(『ド・イデ』pp.25-26、引用中のすべての強調は原著、以下同様)

こうした人間の存在規定に基づいてマルクスは、その師フォイエルバッハの唯物論についても、人間活動を対象的活動として見ないことから観念論に陥っていると批判して次のように論じている。

彼(フォイエルバッハ、筆者注)は次のことを見ない。つまり、彼をとりまいている感性的世界は、決して、永遠の昔から直接無媒介に存在している、常に自己同一的な事物なのではなく、産業と社会状態の産物であるということ、しかも、感性的世界は歴史的産物であり、活動の成果であるという意味でそうなのだということを。(『ド・イデ』p.44)

そして、人間の歴史は、そもそもその初めからすでに欲求及び生産の様式によって条件づけられ、人間たちそのものと同時に成立している。そこには、人間相互

間の唯物論的な連関が見られ、かつ、それはたえず新しい形態をとり、それゆえに一つの歴史を現わしていくと指摘した上で、そうした中で人間は精神が自己を意識として外化するという形で意識を有していると主張する(『ド・イデ』p.56)。人間の生存形態・生活様式は物質的な生産・生活システムを基盤としながら歴史的に発展し、精神(感的世界や意識)もそうした生産・生活システムの史的発展とともに(再)構成され発展していくという、精神についての弁証法的唯物論である。そして、『ド・イデ』の欄外の書き込みとなるが、意識についてマルクスは以下のようない決定的な見解を提示する。

私の環境に対する私の関係が私の意識である。

(『ド・イデ』p.58)

そして、意識の対象あるいは内容、さらに人間の存在についてマルクスは次のように言う。

意識とは意識された存在以外の何ものでもりえない。そして、人間の存在とは、彼らの現実的な生活過程のことである。…現実に活動している人間たちから出発し、そして彼らの現実的な生活過程から、この生活過程のイデオロギー的な反映や反響の展開も叙述される。人間の頭脳における茫漠とした像ですら、彼らの物質的な、経験的に確定できる、そして物質的な諸前提と結びついている、生活過程の、必然的な昇華物なのである。(pp.30-32)

われわれはいつ如何なる時でも自然的で物理的な特定の位置(私の環境)に置かれている。わたしの意識というのは、そうした位置でわたしと物理的な自然との関係はどうなっているか、わたしと目の前や周りにいる人間との関係はどうなっているか、わたし自身の身体や情動などはどうなっているかについての表象である(『ド・イデ』p.28)。より端的に言うと、目標に主導された実践的な対象的活動に従事するわたしを起点としてわたしが視ているわたしを含めた世界=関係がわたしの意識である、となる。比喩的に言うなら

ば、意識とは、実践的な対象的活動のダイナミズムに連動した、実践に従事するわたしにおける感情も含めた心模様のダイナミズムのようなものであると言つてもよいだろう。

### 1-2 意識からイデオロギーへ

次に、マルクスは意識の歴史的な発展に目を向ける。

意識は、もちろん当初は、単に最も身近な感性的環境についての意識であり、自らを意識し始めた個人の外部に存在する他の人物・事物との、局限された連関の意識である。…それは単なる群生意識であり、ここで人間が<羊>閥羊から区別されるのは、ただ彼の意識が本能の代わりを担っていること、言い換えれば、彼の本能が意識的な本能であるということによってでしかない（『ド・イデ』pp.57-58）。

ここで言う意識を原初的意識と呼んでおこう。マルクスは人間の社会文化史の時計の針をせわしく進めてさらに続ける。

この閥羊意識ないし部族意識はさらなる発展と成熟を遂げていくが、それをもたらすのは、生産性の向上、欲求の増大、そしてこれら両者の根底をなす人口の増大である。これに伴って…分業が行われるようになる。分業は、物質的労働と精神的労働との分割が現れた瞬間から、初めて現実に分割となる。  
<イデオローグの最初の形態、僧侶が同時に生じる。>この瞬間から、意識は、現存する実践の意識とは別の何かであるかのように、何らかの現実的なものを表象しないでも現実的に何かしらを表象しているかのように、思い込むことが現実にできるようになり、一この瞬間から、意識は、自己を世界から解き放って「純粹な」理論、神学、哲学、道徳、等の形式へと移ることができるようになっている。（『ド・イデ』pp.58-59）

このように、分業以降に新たに現れた、何らかの現実的なものを表象しなくとも現実的に何かしらを表象

しているかのように思い込むことができるようになった意識をマルクスはイデオロギーと呼んでいる。つまり、先の原初的な意識に対して、物質的な対象的労働つまり作ることや暮らすことの実践から解き放たれた精神あるいは観念的構成体一般のことをイデオロギーと言っているのである。上記引用中の「イデオローグの最初の形態、僧侶が同時に生じる」はその具体例への言及である。後の唯物史観の公式や階級闘争の見解などはすべてこうしたイデオロギーの見方から展開されている。

### 1-3 意識とことば=記号

そのような意識やイデオロギーと言語の関係はどのようにになっているのか。マルクスは以下のように論じている。

それ（意識、筆者注）はしかし、もとより「純粹」意識としてではない。「精神」はそもそも最初から物質に「取り憑かれて」いるという呪いを負っており、ここでは物質は運動する空気層、音、要するに言語という形で表れる。言語は意識と同じ年である。一言語は、実践的な、他の人間たちにとっても実存する、それゆえに私自身にとってもまた実存する現実的な意識である。そして言語は、意識と同様、他の人間たちとの交通に対する欲求と必要から、初めて生じる。（『ド・イデ』pp.56-57）

意識と言語は同じ社会文化史という振りかごで誕生し成長したものであるとの見解である。また、「言語は、実践的な…」の行にはバフチンの対話原理へと発展する対他-対自の関係行為態に即した意識の存在既定が提出されている。バフチンの『マルクス主義と言語哲学』<sup>2</sup>（以下『マル言』とする）の第1部第1章にある以下の一節は、上のようなマルクスの見解を記号論的にパラフレーズした言明であると見ることができる。

イデオロギー現象の現実〔文化〕とは、社会的な記号の客観的現実です。さらにいえば、この現実

〔文化〕の法則は、記号によるコミュニケーションの法則でもあります。コミュニケーションの法則は、さらに社会=経済的な諸法則の総体によって、直接に規定されています。…イデオロギー現象とその法則とは、社会的なコミュニケーションの諸条件・社会的なコミュニケーションの諸形態にしっかりと結びついているものだと考えました。記号の現実の在り方は、この社会的なコミュニケーションによって余すところなく規定されております。なぜなら、記号という存在は、このコミュニケーションが物象化された結果にほかならないからです。（『マルクス』pp.22-23、〔 〕内は訳者の補充）

マルクスとバフチンの関係については第3章でさらに論じることとして、次章ではマルクスとヴィゴツキーについて論じる。

## 2 マルクスからヴィゴツキーへ

### 2-1 ヴィゴツキーによるマルクス主義心理学の構築へ

2-2から2-4で言及する「意識」と「危機」を收めている『心理学の危機』（ヴィゴツキー, 1982/1987）という本の序文でレオンチエフは、1917年のソビエト革命後のロシアの心理学界の状況を以下のように書いている。

この時期（1917年のソビエト革命後、筆者注）、心理学者にとって主要な課題は、革命前に唱道されていた哲学的観念論に依拠する個人意識の内観的心理学にかわる新しい理論を創出することであった。新しい心理学は、弁証法的唯物論と史的唯物論の哲学から出発するものでなければならなかった。つまり、それは、マルクス主義心理学となることが求められていた。（レオンチエフ, 1982/1987, p.10）

このような時期に彗星のごとく現れたのが若き心理学者ヴィゴツキーである。ヴィゴツキーは1924年の第2回全ロシア心理神経学会に参加しいくつかの発表を行った。ヴィゴツキーの発表「反射学的研究と心

理学的研究の方法」は、ソ連邦教育科学アカデミア一般心理学研究所所長のコルニーロフに強い印象を与え、コルニーロフはヴィゴツキーを同研究所で働くように招いた。ヴィゴツキーはこれを受け入れ、モスクワでのヴィゴツキーの活動が始まった。

ヴィゴツキーは、当時の唯物論的潮流が無視するかあるいは注意を向けても古い観念論的心理学との妥協であったりした意識の問題を正面から捉えて心理学の対象としてしっかりと据えることが、マルクス主義心理学建設のために乗り越えなければならない課題であると考えた。当時のヴィゴツキーの洞察をレオンチエフは次のように語っている。

意識は、人間の生活活動のすべてにわたって重大な意義を有する心理学的実在と見なされねばならず、具体的に研究され、分析されなければならない。20年代の他の心理学者たちとは違ってヴィゴツキーは、意識の問題のなかに、たんに具体的な研究方法の問題だけでなく、何よりもまず、心理科学の将来の建設の礎石となる、巨大な意義を孕んだ哲学的=方法論的問題を、見抜くことができたのである。（レオンチエフ, 1982-1987, p.17）

反射学を主な批判対象としている当時のヴィゴツキーが持っていた見通しは、多少なりとも複雑な人間の行動を問題とするならばそこに意識の働きを見ないわけにはいかないというものであった。

### 2-2 意識の捉え方

この段階でヴィゴツキーは意識をどのように捉えていたのだろう。「行動の心理学の問題としての意識」（ヴィゴツキー, 1925/1987、以下「意識」とする）でヴィゴツキーは、行動とは、反射の相互作用の中で「勝利した反応の体系である」（「意識」p.73）と主張している。そして、意識のメカニズムについて次のように論じている。

もしも同一の反射系ではなくて、さまざまな反射系を考えに入れ、しかもある反射系から他の反射系

への中継の可能性を考えに入れるならば、まさにこのメカニズムは、本質的には、客観的な意義における意識のメカニズムそのものなのである。すなわち、自分自身にとって（新たな諸作用にとって）の刺激（自らはたらきかける作用）となるわれわれの身体の能力 — これこそ意識の基礎なのである。こうして今や、個々の反射系の間には疑う余地のない相互作用が存在し、一つの反射系が他の反射系のうちに反映するということについて語ることが許されよう。犬は、塩酸にたいして唾液の分泌（反射）をもって反応する。だが、この唾液自体が、嚥下反射や唾を吐き出す反射にとっては、新しい刺激になる。自由連想において、私は《バラ》という刺激語にたいして《スイセン》という単語をあげる。これは反射である。だがそれもまた、次にくる単語 — 《ストック》にとっては刺激となる。これらはすべて、一つの反射系あるいは近接の協働関係にある反射系の内部のものである。狼の遠吠えは、刺激となって私の身体や表情に恐怖の反射を引き起こす。そして乱れた呼吸、高鳴る動悸、のどの渴きといった諸反応は、「こわい」と声に出して言ったり、頭の中で考えたりすることを私に強いる。ここには、ある反射系から他の反射系への中継が存在する。（「意識」p.76）

ヴィゴツキーによると、意識とはさまざまな反射系の相互作用・反映・相互刺激である。他の系にたいして刺激として伝達され、他の系のうちに反響を呼び起こすものは意識的なものである。意識は常にこだまであり応答器官であるとヴィゴツキーは考えていたのである（ヴィゴツキー、1925/1987, p.77）。

意識性及び意識をこのようなものとして理解した上で、ヴィゴツキーは循環反応に注目して、それは1つの反応が他の反応によって制御され調整されるような結合であると指摘し、そのことから、行動に対する意識の調整的役割に言及している（「意識」p.77）。さらに同論文の最後のほうでヴィゴツキーは、反射学の実験における言葉による条件づけ（二次的条件反射）に注目して、反射理論の枠組みの中ではありながら、意識についての心理学の可能性を追求しようとしている

（「意識」pp.82-83）。

## 2-3 人間行動についての歴史的・社会的な理解と能動的適応

将来に構築すべき意識の心理学の一側面として、ヴィゴツキーはこの時期にすでに人間の行動についての歴史的で社会的な理解の視点を提示している。

だが、人間については事情は異なる。人間に關しては、そのすべての行動を幾分なりとも完全にとらえるためには、新たな諸項がこの定式に導入されねばならない。ここではなによりもまず、人間は動物に比べてはるかに広い範囲にわたる相続経験を有するという事実が指摘される必要がある。人間は、物理的に相続された経験を利用するだけではない。われわれのすべての生活・労働・行動は、先行世代の経験、父から息子へと生まれながらに伝達されるのではない経験のきわめて広範な利用に立脚しているのである。われわれはこれを、仮に、歴史的経験と呼ぶことにしよう。

さらにそれと並んで、人間の行動のきわめて重要な成分となる社会的経験・他の人々の経験が提起されなければならない。私は、私の個人的な経験のなかで自分の無条件反射と環境の個々の要素との間に連結された結合ばかりではなく、他の人々の経験のなかでうち立てられた数多くの結合をも利用している。…われわれはこれを、人間の行動の社会的成分と呼ぶことにしよう。（「意識」pp.70-71）

また、それと並行して、動物と比べた場合の人間行動の本質的な新しさとして環境を自分に適応させという能動的な適応の見解も述べている。ヴィゴツキーは当該論文の扉でも以下と同じマルクスのクモの巣と人間の織匠や建築師との対比を引用している。

最後に、人間の行動にとって本質的に新しいこととして、人間の適応とその適応に結びついた行動とが、動物にはない新しい形態をとるようになることがあげられる。すなわち、動物の場合は、環境にた

いする受動的な適応であり、人間の場合は、環境を自分に適応させる能動的な適応である。…自分の巣を編むクモや蜜蜂で巣房をつくるミツバチは、それを、本能にもとづいて、機械的に、いつも同じ仕方で行うのであって、その作業にあたって他の全ての適応反応以上の能動性を示しはしない。織匠や建築師にあっては事情がことなるべく。マルクスの語っているとおり、彼らは、自分の作品を前もって頭のなかで築いている。つまり、労働の過程で造られる成果は、その労働の始まる前にすでに観念的に存在しているのである。このマルクスのまったく争う余地のない説明が示しているのは、人間の労働にとっては経験の倍化が必須のものである、ということ以外の何ものでもない。労働は、労働者が自分の表象のなかでその動作・その素材のモデルにたいしてすでに行なったことを、手の動作や素材の変形という形で繰り返す。そしてまさにこのような経験の倍化こそ、人間に能動的な適応形態の発展を可能ならしめるものであり、動物には存在しないものなのである。（「意識」p.71）

このようにこの段階のヴィゴツキーにおいてすでに、歴史的な視点と社会的な視点、そして環境への能動的な適応の視点が提示されているのである。この時期のヴィゴツキーの見解に関して中村は、これら3つの視点が相互に関連づけられて意識論として定式化されていればこの時点でヴィゴツキーの文化・歴史的理論は芽吹いていたであろうが、そこまでは行っていないという意味で、この時点では文化・歴史的理論の芽吹きへの胎動が見られる、と論じている（中村、1998, p.36）。

#### 2-4 「危機」(1926-27)におけるヴィゴツキー

上の論文に続いてヴィゴツキーは1926年から1927年にかけて「心理学の危機の歴史的意味」（ヴィゴツキー、1926-27/1987、以下「危機」とする）を書いている。同書（実際には草稿）でヴィゴツキーは、当時の代表的な心理学諸流派（反射学、ゲシュタルト心理学、精神分析など）の理論を吟味しそれらに徹底

した批判を加え、真に科学的な心理学の方法論の確立をめざして考察を進めている。

ヴィゴツキーは弁証法の適用においてそうした科学的心理学確立への可能性を見出している。そして、心理学の弁証法は同時にその対象である人間の弁証法ともなるとヴィゴツキーは見ている。「危機」の冒頭に近い部分でヴィゴツキーは以下のように論じている。

このように弁証法は、一般心理学の基礎としての認識論的批判と形式論理学に対立させられなくてはならない。弁証法は「あらゆる運動のもっとも一般的な諸法則に関する科学と解されている。このことのなかに、弁証法の諸法則は自然並びに人間の歴史における運動にたいしても、思考の運動にたいしても、同じように妥当性をもたなければならない」ということが含まれている（『自然の弁証法』p.572、筆者注）。このことは心理学の弁証法が…運動のもっとも一般的な形式についての（行動およびこの運動の認識の形式における）科学であることを意味している。つまり、自然科学の弁証法は同時に自然の弁証法でもあるように、心理学の弁証法は同時に心理学の対象としての人間の弁証法でもあるのだ。（「危機」pp.132-133）

そして、同書の主要部で当時の代表的な心理学諸派を綿密に吟味し批判した上で、最後の15章と16章(pp.238-282)を費やしてヴィゴツキーは、マルクスが経済学において『資本論』で成し遂げたことを範として、われわれ心理学者も弁証法による心理学つまり一般心理学を構築しなければならないし、そのためには新たな方法論がどうしても必要であると滔々と論じるのである。

弁証法は自然、思考、歴史を包摂する。それはもともと一般的で、極度に普遍的な科学である。心理学的唯物論の理論、あるいは心理学の弁証法も、私が一般心理学と呼ぶものである。こうした媒介的な理論—方法論、一般科学—をつくり出していくためには、その分野の現象の本質およびそれらの変化

の法則を解明し、質的・量的な特性、それらの因果性を明らかにしなければならず、それに固有のカテゴリーや概念をつくり出さなければならない。一言でいえば、それぞれの『資本論』をつくり出さなくてはならない。…心理学には自分の『資本論』—階級・土台・価値などのような自分の概念が必要である。それらによって心理学は自分の客体を表現し、記述し、仮定することができる…。(「危機」pp.260-261)

さらに、ヴィゴツキーは15章の冒頭近くで、有名な「細胞」の一節を書いている。

マルクスはブルジョア社会の「細胞」—商品価値の形態—を分析して、発達した身体のほうが細胞よりも研究しやすいことを示している。彼は細胞のなかに全機構、全経済構成体の構造を読みとったのである。…心理学の細胞—一つの反応のメカニズム—を看破する者がいたら、彼はあらゆる心理学の鍵を手にすることになる。(「危機」p.244)

では、心理学における「細胞」は何か。「危機」の中ではそれは「一つの反応のメカニズム」として言及されているだけである。人間に固有のそうした反応のメカニズムが具体的に取り出され明らかにされるのは、本書のすぐ後に書かれた「子どもの文化的発達の問題」(ヴィゴツキー, 1928/2008)においてである。そのような意味で言うとこの一節は、心理学の「細胞」を自分が必ず見つけるというヴィゴツキーの力強い宣言だと見ることができる。

## 2-5 ケーラーの研究と『人間行動の発達過程』(1930)

「危機」に続いて、ヴィゴツキーは、ケーラーによるチンパンジーの研究でのデータに大きく依拠して『人間行動の発達過程—猿・原始人・子ども—』(ヴィゴツキーとルリア, 1930/1987、以下『人間行動』とする)を書いている。ヴィゴツキーがケーラーの研究に注目したのは、ヴィゴツキー自身の心理学理論の構築に際してその基盤としているマルクス＝エン

ゲルスの史的唯物論をケーラーの研究が行動発達の領域において実証するものだったからである(中村, 1998, pp.75-76)。ケーラーの研究でヴィゴツキーがとりわけ注目したのは、人間に固有の心理的なもの(理性)の起源を動物との連続性と非連続性の統一において捉えることを可能にした(中村, 1998, p.76)点であった。ヴィゴツキーはマルクスを引きながら次のように論じている。

マルクスは労働過程の本質を次のように見なしている。つまり「自然そのものによって与えられた対象は、その活動（人間の）の器官となり、このように聖書に反してその器官の自然的な程度を延ばしながら、自身の身体の器官へそれを取り込むようになる」(マルクス/エンゲルス, 1890/1965, p.235、筆者注)。それ故、人間の発達は、適応の基本的形態へ移行するように、人間の労働への移行の瞬間から、すでにその人工的器官の改良となり、「聖書に反して」、つまり自然的器官の改良に沿うのではなく、人工的道具の改良に沿って動くのである。これと同様に人間の心理発達の領域においても、人間が行動の固有な過程を獲得することを可能ならしめる記号の発明と使用の瞬間から、行動の発達の歴史は著しくこれらの人工的な《行動の手段》の発達の歴史へとそして人間が自分の固有な行動によって獲得する歴史へと変わっていく。…このようにわれわれは、人間の生物学的適応の発達の領域におけると同様に、人間の心理発達の領域において道具の使用の導入の瞬間から急変が起こると考えている。(『人間行動』pp.54-55)

以上のような胎動期と萌芽期を経て、文化的発達、道具的方法、心理の記号による被媒介性、外部から内部への転回などの独自のカテゴリと概念を持った文化・歴史的理論がわずか10年弱の間に姿を整えていくのである。そのようなヴィゴツキー心理学の到達点として現在われわれは、『文化的・歴史的 精神発達の理論』(ヴィゴツキー, 1930-31/2005)や『思考と言語』(ヴィゴツキー, 1934/2001)などを手にすることが

できるのである。

## 2-6 マルクスとヴィゴツキー

本節では、マルクスとヴィゴツキーの関係について検討する。ここに言うマルクスには、広義にエンゲルスも含めることとする。

端的に言うと、上で検討した初期のヴィゴツキーにおいてはマルクス主義や弁証法などの言葉は頻繁に出てくるのであるが、具体的なマルクスへの言及や引用は実際にはひじょうに限定されている。限定されているというよりも、実際には1点だけではないかと思われる。それは、上の引用に見られるように、またヤロシェーフスキー（1992/1994）が指摘しているように「マルクス主義の定式 — 人間は自然を変えることによって自分自身も変わる」だけではないかと思われる。ほぼ同時期に書かれた実践的性格を有する『教育心理学講義』（ヴィゴツキー, 1926/2005）でもほぼ事情は同様である。ヤロシェーフスキーの指摘を以下に引用する。

ヴィゴツキーはマルクス主義の定式 — 人間は自然を変えることによって自分自身も変わる — に特に共鳴した。定式にはフィードバックの原理（行為の結果が、行為をおこなう主体に対し「逆の」因果的影響を与える）が据えられていた。…マルクス主義は、個人とその行為の間の媒介物として労働の道具を導入することで、フィードバックの原理に新しい内容を与えたのである。マルクス主義の中で汲み取られたこの思想は、ヴィゴツキーの最初の学問的プログラムに研究上の刺激を与えた。この思想に基づいて、心理的道具 — それにより人間が他人とコミュニケーションしながら自分自身の心理的組織を変える記号 — についての仮説が立てられたのである。（ヤロシェーフスキー, 1992/1994, p.45）

そして、実際の引用や言及も上の定式に関連する『資本論』第1巻からのものと『自然の弁証法』（エンゲルス, 1873-83/1968、以下『弁証法』とする）からのものに限られる。『人間行動』で比較的じっく

りと検討されている「猿が人間化するにあたっての労働の役割」（『弁証法』の中の一節）もその一例である。この時期のヴィゴツキーの意識に関する議論では、その内容から推して本稿の第1章で論じたようなマルクスの意識論への言及があつてもよさそうなものなのだが、それが見あたらないのである。

ヴィゴツキーの著作で『ド・イデ』や『テーゼ』などへの言及が見られるのは、ヴィゴツキーの主要な著作を見た範囲では、1929年に書かれたと言われている「人間の具体的心理学」（ヴィゴツキー, 1929/2008、以下「具体的心理学」とする）においてである。具体的な言及と該当すると思われる出典を見てみよう<sup>3</sup>。「具体的心理学」についてのページは、前が所収の本のページで、後ろが同論考単独で数えた場合のページである。

### □ 言及 1

(1) 物事に対する一般的弁証法的接近 — この意味においては、すべての者が自己の歴史をもつ。この意味においてマルクスは言う：ただ一つの科学は、歴史である。自然科学は自然の歴史、自然史。

(2) 本来の意味の歴史は、人間の歴史。（「具体的心理学」p.238/p.1）

出典：われわれはただ一つの学、歴史の学しか知らない。歴史は二つの側面から考察されることができ、自然の歴史と人間の歴史とに区分されることができる。しかし両側面を切り離すことはできない。人間が生存する限り、自然の歴史と人間の歴史は、相互に条件づけあうのである。（『ド・イデ』p.24）

### □ 言及 2

人間の心理学は、ホモ・ファーベル（働く人）を扱う。（「具体的心理学」p.239/p.2）

出典：本稿 1-1 の最後の引用

### □ 言及 3

マルクス参照：ペテロとパウロ。他人を通してわれわれは自分となる。文化的発達過程の本質は、純

粹論理形式においてまさにその点にある。（「具体的心理学」 p.240/p.3）

**出典：**人間は最初まず、他の人間のなかに自分を映してみるのである。人間ペテロは、かれと同等なものとしての人間パウロに関係することによって、はじめて、人間としての自分自身に関係するのである。しかし、それとともに、またペテロにとっては、パウロ全体が、そのパウロ的な肉体のままで、人間という種族の現象形態として認められるのである。（マルクス／エンゲルス，1890/1965, pp.71-72）

#### □ 言及4

マルクス：階級について。人格は、自分の内にあるもの（即自）が、つまり以前自分の内にあったもの（即自）が、他人のためのもの（対他）になることを通して、自分のためのもの（対自）になる。（「具体的心理学」 p.240/p.3）

**出典：**自然の人間的本質は社会的な人間によって初めて自覚される。というのも、社会的な人間によって初めて、自然の人間的本質が人間をつなぐ糸として、自分と他人のたがいに出会う場として、また、人間の現実に生きる場として自覚されるからだし、みずからの人間的な生活の基礎として自覚されるからだ。（『経哲草稿』 p.148）

#### □ 言及5

マルクスのパラフレーズ：人間の心理学的本性は、心内化され、人格の機能となり、その構造の形態となつた社会的諸関係の総体である。（「具体的心理学」 p.243/p.6）

#### □ 言及6

われわれにとっては、社会的人格=個人に体現された社会的諸関係の総体（社会的構造に基づいて構築される心理的諸機能）（「具体的心理学」 pp.249-250/p.p.12-13）

#### □ 言及7

…人格=社会的諸関係の総体…

**概要：**人格は、社会的諸関係の総体である。（「具体的心理学」 p.252/p.15）

**出典：**人間の本質とは、個々の個人の内部に宿る抽象物なのではない。それは、その現実の在り方においては、社会的諸関係の総体なのである。（フォイエルバッハの第6 テーゼ、『ド・イデ』所収の「テーゼ」 p.237）

#### □ 言及8

電話交換手（人格）の真の歴史は、ペテロとパウロの歴史である（マルクス：言語と意識について）—（人々の間の）社会的関係の心理的なもの（人間のうち）への転移。未開人や子どもにおける名前の役割。（「具体的心理学」 p.249/p.12）

**出典：**本稿 1-3 の最初の引用

しかしながら、ヤロシェーフスキイ（1992/1994, p.45）が指摘しているように、同稿の主旨は社会的相互志向によってのみ個人は人間化するというマルクスの主張にあるのではなく、むしろ人格のダイナミクスに基づくドラマ的な具体的心理学の構想にあると言わなければならない。

### 3 マルクスとバフチン

#### 3-1 マルクスとバフチンの連続性

1929 年に書かれた『マル言』の冒頭でバフチンは「言語哲学の諸問題は、今日、マルクス主義にとって最も緊急で最も重要な問題となっております。なぜなら、マルクス主義の方法は、学問的作業の最も重要な領域のすべてにおいて、他ならぬこれら言語哲学の諸問題と深く関わっているからです。これらの問題を独立した問題として検討し、独自に解決することなしには、今後の生産的な前進も期待しえないからです」（『マル言』 p.10）と同書の問題意識を述べている。そして、同書の主要部分である第 1 部と第 2 部の議論はすべて、本稿の 1-3 でそのスタート地点を示したように、実質的に、マルクスが『ド・イデ』や「テーゼ」で展開した意識論を敷衍したものとなっている。

バフチンが『マル言』で全面的に展開した言語（記号）と心理とイデオロギーとコミュニケーションの理論は、マルクスの意識論と緊密な連続性があると見られるのである。

しかしながら、『マル言』でバフチンは、『ド・イデ』や「テーゼ」に全く言及していないのである。1960年前後に書かれた「テキストの問題」では言及（バフチン、1959-61/1988, p.238）がある『ド・イデ』に関しては、1926年にモスクワのマルクス・エンゲルス研究所の機関誌にドイツ語で掲載されてはいるが、『マル言』執筆の時点ではバフチンは手にしていない可能性が高いと見られる。「テーゼ」については、1927年に書かれた『フロイト主義』で引用されている（バフチン、1927/1979, pp.26-27）ので、『マル言』では単に言及も引用もしていないということになる。桑野が指摘しているように（桑野、2002, p.71）、バフチンはマルクスの思想を出発点として独自のマルクス主義的な記号学を築こうとしたということであろうと思われる。

### 3-2 イデオロギーと心理と記号

マルクスとバフチンの連続性を検証するという趣旨で、本節ではイデオロギーと心理と記号についてのバフチンの議論を見てみたい。

本稿の第1章の議論では、人間集団つまり社会の側にある意識についての議論と個人に生じる意識についての議論が混淆している感があった。これに対し、バフチンは、社会の側にある意識一般をイデオロギーと呼び、個人に生じる意識を主観的心理<sup>4</sup>と呼んで、両者を一旦分明に区別している。そして、そのような社会的なイデオロギーの現実と個人の主観的心理の関係について以下のように論じている。

イデオロギー的現実〔文化〕は、経済的下部構造のうえに直接構築されている上部構造ですが、個人の意識は、このイデオロギーという上部構造を構築する建築家ではなく、イデオロギー記号という社会的建造物を栖とする、その住人にすぎません。（『マル言』p.22）

ここでは、個人の心理に対するイデオロギーの先行性が明確に主張されている。

また、バフチンは、マルクス主義の哲学に基づく客観的心理学のあり方について論じている章で、主観的心理について、その現実はまさに記号の現実であると主張している。

心理の内容を根底から決定している過程は、生体の内部で生起する過程ではなく、個々の生体がそれに関与するとはいえ、生体の外部で生起するような過程です。人間の主観的な心理は、自然科学的な分析によって物や自然の過程と同じように扱いうる対象ではなく、イデオロギーとして了解されねばならない対象であり、了解を必要とする社会的=イデオロギー的な解釈の対象です。内的心理の現実とは、まさしく記号の現実です。記号という実体をのぞいては、心理はありません。（『マル言』pp.52-53）

そして、その主張をさらに次のように展開している。

確かに記号という実体をのぞいても、生理的な過程、神経組織の過程はあります。しかし、人間存在の特性としての主観的心理はありません。これは、生体のうちで営まれる生理的な過程とも、生体を取りまき、心理がそれに反応し、なんらかの仕方でそれを反映する外部の現実とも、根本的に違うものです。主観的心理は、その存在の場を、いわば、生体と外部世界とのはざまのごとき場所、この2つの現実領域の境界線上にもつものです。その境界線上で、生体と外部世界とが出会いうわけです。が、それは、決して物理的な出会いではありません。生体と外部世界とは、この境界領域で記号を介して出会いうのです。心的経験なるものは、生体と外部世界との接触の、記号による表現にほかなりません。（『マル言』pp.53-54）

このように、バフチンは、主観的心理を記号という第三項を介した弁証法の結節点として把握している。バフチンは、心理の内容を決定する過程は「生体の外

部で生起するような過程」と言っているが、この「生体の外部」とは記号の領域のことである。つまり、「生体のうちで営まれる生理的な過程」を自然的な内部とするならば、記号の領域は、外部世界とそうした生理的な過程の境界領域あるいは結節点にあるということで、やはり生体の内部で起こる過程ではあるが、自然的な内部（生理的な過程）ではなく、その外部で生起する過程であると言っているのである。そして、この把握の仕方は高次精神機能についてのヴィゴツキーの三角形による定式化（図1）とぴったり符合する。

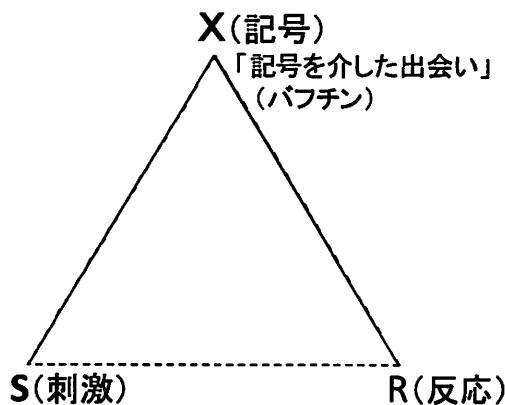


図1 ヴィゴツキーの三角形  
(Vygotsky, 1930-35/1978, p.40)

すなわち、バフチンもヴィゴツキーも、主観的心理とは外部世界と交わりながら活動する人間において記号によって媒介されることによって実存するようになる現実であるという精神の記号による被媒介性の見解を提示しているのである。

イデオロギーに関して別の面を見てみよう。1-2で見たように、マルクスは、物質的な対象的労働つまり作ることや暮らすことの実践から解き放たれた精神あるいは観念的構成体一般のことをイデオロギーと呼んでいる。バフチンも同様のものをイデオロギーと言っているが、バフチンはさらにそれを真のイデオロギーと呼び、その他に日常的な生活の運営に関与している観念的なものを日常イデオロギーと呼んでいる。バフチンは、『マル言』の翌年に出版された「芸術のことばの文体論」で日常（生活的）イデオロギーの高次の層というものを付け加えて、社会学的なイデオロギー的コミュニケーション論をさらに展開している（バフ

チン, 1930/2002, pp.130-131）。バフチンの日常イデオロギーと真のイデオロギーの対比は、マルクスにおける原初的意識とイデオロギーの対比に、そして個体発生でヴィゴツキーが言う生活的概念と科学的概念の対比に概略的に対応させることができるだろう。

一方で、バフチンはイデオロギーと心理の関係についても議論している。やや長くなるが引用する。

心的過程はイデオロギー【記号】に充たされることによって生きております。それと同時に、イデオロギー記号も、心理内に移入され、そこで経験されることによって生きております。心的経験とは、いざれ外的なものとなる内的なものです。イデオロギー記号とは、いざれ内的なものになる、外的なものです。生体内部の心理は、その固有の領域を超えるものです。なぜなら、それは、個体としての生体の内部に入りこんだ社会的なものだからです。他方、イデオロギー的なものも全て、社会=経済的な領域にありながらも、やはりその本来の領域を超えるものです。なぜなら、生体の外側にありながらも、イデオロギー記号は、その記号の意味を実現する【理解され、経験される】ためには、【生体内部の】内的世界に入りこまなければならないものだからです。心理とイデオロギーとの間には、このように絶えざる弁証法的な相互作用【相互変換】の関係があります。…【心理内の】内的記号は、【外的な】イデオロギーになるためには、心理の脈絡（生理的・伝記的な脈絡）の中に埋没した状態から引き出され、単に主観的にすぎぬ経験ではないものにならなければなりません。【外部の】イデオロギー記号も、生きた記号としてありつづけ、博物館に収められた不可解な遺物という名譽ある位置に転落しないためには、内面の主観的な記号の流れの中に沈められ、主観の声の響きを持たねばなりません。（『マル言』pp.83-84）

このようにバフチンにおいては、イデオロギーはいわば社会に属するもので、心理は個人（これも元来社会的なものであるが）に属するものであり、記号はそ

の両者の具象化に関わるものとして両者にまたがりそれゆえ両者の橋渡しをするものとして描定されている。そして、このような定式化はヴィゴツキーの文化的発達の一般的発生法則（ヴィゴツキー, 1930-31/2005, p.182）に繋がると見ることができる。

### 3-3 心的過程と記号の間の往還運動

上の引用の最初の4文で、バフチンは心的過程と記号について「生きております」というふうに比喩的に論じている。これはどういう意味だろう。

最初の文は、心理や意識はそれ独自で存在することはできず、記号として具象化されなければならないということであり、第3文は、心における経験というものはいずれ外的なもの（内言あるいは外言のいずれにせよことばとしての具象化）となる（あるいはならざるを得ない）内的なものだということである。では、第2文と第4文はどういう意味だろう。それを理解するために、この2文を結合し、その後ろに上の引用の直前にある一文（下線部）を接続してみよう。

イデオロギー記号も、心理内に移入され、そこで経験されることによって生きております。イデオロギー記号とは、いずれ内的なものになる、外的なものです。内的記号の脈絡のうちに組み入れられない外的記号、つまり理解もされず経験もされえない外的記号は、記号ではなくなり、物理的な物質に転化してしまいます。（『マルクス』p.83の筆者による再構成）

こうすると、この部分でバフチンは理解の過程に言及していることがわかる。すなわち、理解されない外的記号=外言つまり理解者の心理や意識の脈絡の内に編入されない外的記号=外言は、ことばではなくなり物理的な物質に転化してしまう。それとは逆に、理解される外言は理解者の心理内に移入され、そこで理解者に経験されることによって生きる。つまり、外言とは、いずれ理解者の内的な心理過程の一部となる外的なものである、となる。

この2つの言語心理過程を総合すると、一例とし

て対面的な言語活動について言うと、対面的に取り交わされることば（外言）のやり取りに沿って、このような心的過程と記号の間の往還運動が対話者たちそれぞれにおいて行われていることとなる。そして、バフチンによると、そうした心理過程はポリフォニックに行われることとなる（西口, 2013, pp.137-141）。

### 4 おわりに

第二言語教育学の主要な関心は、学習者における言語活動従事能力の発達にある。個人における意識の記号による被媒介性という見解においてはヴィゴツキーとバフチンは共通している。しかし、ヴィゴツキーにおいてはそれ以降は明快に発達研究のほうに目を向けることとなる。それに対しバフチンは、イデオロギーと心理の関係（3-2）、心理と記号の関係（3-2）、イデオロギーの層的構造（3-2）、記号を橋渡しとしたイデオロギーと心理の関係（3-2）、言語活動（コミュニケーション）における心的過程と記号の間の往還運動（3-3）、そしてバフチン言語哲学の真骨頂である対話原理などに議論を発展させていく。バフチンのこうした議論は、人と人の接触・交流（バフチンの用語では交通（obschenie））にこれまでにない新たな視点を提供するものとして、第二言語の習得と教育の研究の立場から大いに注目されるのである。

### 注

1. ただし、本稿で『ド・イデ』としているのは実際の『ドイツ・イデオロギー』という本の最重要部である第1巻第1編の「フォイエルバッハ」編のみである。
2. 邦訳は北岡（1980）と桑野（1989）がある。本稿では、北原（1980）を参照している。
3. 典拠については同論考邦訳の末尾に記されている訳者による注を参考にした。ちなみに、『ド・イデ』については、初めて活字になったのは1926年にモスクワのマルクス・エンゲルス研究所が発行する機関誌にドイツ語で掲載されたもの（一般にリザヤノフ版と呼ばれる）で（小林, 2002）、

ヴィゴツキーはそれを参照したものと考えられる。「テーゼ」のほうは1888年に出版された『フォイエルバッハ論』(エンゲルス, 1888/1960)に付録として収められている。

4.『マル言』では、内的心理 (inner psyche)、内的経験 (inner experience)、心的経験 (psychic experience)、心理 (psyche) という言葉を、観点による若干のニュアンスの違いはあるものの、ほぼ同じものを指すものとして使用している。

## 参考文献

※年号は2つある場合は、前者が原著出版年あるいは執筆年で、後者が翻訳出版年である。

### 邦文

ミハイル・バフチン、磯谷孝・斎藤俊雄訳 (1927/1979)『フロイト主義』新時代社

ミハイル・バフチン、北岡誠司訳 (1929/1980)『言語と文化の記号論 — マルクス主義と言語の哲学 —』新時代社

ミハイル・バフチン、桑野隆訳 (1929/1989)『マルクス主義と言語哲学』未来社

ミハイル・バフチン (1930)「芸術のことばの文体論」『バフチン言語論入門』ミハイル・バフチン著、桑野隆・小林潔編訳 (2002) せりか書房

ミハイル・バフチン (1959-1961)「テキストの問題」『ことば 対話 テクスト』ミハイル・バフチン著、新谷敬三郎他訳 (1988) 新時代社

エンゲルス, F. (1873-83)『自然の弁証法』、大内兵衛・細川嘉六監訳 (1964)『マルクス=エンゲルス全集 第20巻』大月書店所収

桑野隆 (2002)『バフチン — <対話>そして<解放の笑い>』岩波書店

レオンシェフ, A. N. (1982)「序文」、ヴィゴツキー, L. S.、柴田義松他訳 (1987)『心理学の危機』明治図書所収

マルクス/エンゲルス、廣松涉編訳・小林昌人補訳 (1845-46/2002) 新編輯版『ドイツ・イデオロギー』岩波書店

マルクス/エンゲルス (1844-47)「フォイエルバッハ

に関するテーゼ」、マルクス/エンゲルス、廣松涉編訳・小林昌人補訳 (2002) 新編輯版『ドイツ・イデオロギー』岩波書店所収

マルクス/エンゲルス、大内兵衛・細川嘉六監訳 (1890/1965)『マルクス=エンゲルス全集 第23巻 資本論 第1巻』大月書店

マルクス, K.、長谷川宏訳 (1844/2010)『経済学・哲学草稿』光文社文庫

中村和夫 (1998)『ヴィゴツキーの発達論 — 文化歴史的理論の形成と展開 —』東京大学出版会

西口光一 (2013)『第二言語教育におけるバフチン的視点 — 第二言語教育学の基盤として』くろしお出版

ヴィゴツキー, L. S.、柴田義松・宮坂琇子訳 (1924-33/2008)『ヴィゴツキー心理学論集』新読書社

ヴィゴツキー, L. S.、柴田義松他訳 (1925-30/1987)『心理学の危機』明治図書

ヴィゴツキー, L. S. (1925)「行動の心理学の問題としての意識」、ヴィゴツキー, L. S.、柴田義松他訳 (1987)『心理学の危機』明治図書所収

ヴィゴツキー, L. S.、中村和夫訳 (1926/1985)「反射学的研究と心理学的研究の方法論」『心理科学』第8巻第2号 pp.30-44.

ヴィゴツキー, L. S. (1926-27)「心理学の危機の歴史的意味」、ヴィゴツキー, L. S.、柴田義松他訳 (1987)『心理学の危機』明治図書所収

ヴィゴツキー, L. S.、柴田義松・宮坂琇子訳 (1926/2005)『ヴィゴツキー教育心理学講義』新読書社

ヴィゴツキー, L. S. (1928)「子どもの文化的な発達の問題」、ヴィゴツキー, L. S.、柴田義松・宮坂琇子訳 (2008)『ヴィゴツキー心理学論集』新読書社所収

ヴィゴツキー, L. S. (1929)「人間の具体的心理学」ヴィゴツキー, L. S.、柴田義松・宮坂琇子訳 (2008)『ヴィゴツキー心理学論集』新読書社所収

ヴィゴツキー, L. S.、ルリア, A. R.、大井清吉・渡辺健治監訳 (1930/1987)『人間行動の発達過程 — 猿・原始人・子ども —』明治図書

ヴィゴツキー, L. S.、柴田義松監訳 (1930-31/2005)

- 『文化的・歴史的 精神発達の理論』学文社  
ヴィゴツキー, L. S.、柴田義松訳 (1934/2001) 『思考と言語』新読書社
- ヤロシェーフスキー, M. G.、中村和夫訳 (1992/1994)  
「ソビエト心理学におけるエリ・エス・ヴィゴツキーとマルクス主義 — ロシア科学の社会史によせて —」『心理科学』第15巻第2号 pp.84-86.
- 英文
- Hall, J. K. (1993) The Role of oral practices in the accomplishment of our everyday lives: The sociocultural dimension of interaction with implications for the learning of another language.  
*Applied Linguistics* 14: 145-166.
- Hall, J. K. (1995) (Re)creating our worlds with words: A sociocultural perspective of face-to-face interaction. *Applied Linguistics* 16: 206-232.
- Vološinov, V. N. (1929/1973) *Marxism and the Philosophy of Language*. Matejka, L. and Titunik, R.. (trans.). Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Vygotsky, L. S. (1930-35/1978) *Mind in Society: The Development of Higher Psychological Processes*. Cole, M., John-Steiner, V., Scribner, S. and Souberman, E. (eds.). Cambridge, MA: Harvard University Press.